

佐藤嘉一先生をお送りするにあたって

産業社会学部長 木田 融男

佐藤嘉一先生のご退職・最終記念講義にあたって、学部を代表して先生のご紹介をさせていただきます。先生は1984年、立命館大学に赴任されたのですが、私は先生と年齢は11歳違いますが、立命館大学への赴任では同期でございます。今日、先生が定年だということで寂しい気持ちがあります。同時に先生のご紹介を学部長としてさせていただくということで感慨深いものがございます。

先生は1984年に立命館大学産業社会学部に赴任されました。その前は金沢大学大学院文学研究科におられ、大学院は東北大学の文学研究科で、そこで助手もされています。産業社会学部に赴任されてから19年間、たくさんの学内、学外の役職をされました。実に頭の下がる思いです。1993年から学部長をされました。私はこの時に学部主事（今の副学部長）をさせていただき、佐藤先生とは因縁深い関係だなと思っております。それ以降、全学でも大学協議会委員、評議員、図書館長、評議員会の副議長などを歴任され、今年度も人間科学研究所長をされました。それ以外にもたくさんの役職をされ、最後まで大学のため、学部のために尽くされてきました。

佐藤先生の場合、何と言っても学会、それを超えた世界的規模の研究面での活躍がございます。先生の学問に対する真摯な態度、学問業績に対する他の研究者からの確かな信頼はよく知られております。先生との関係で私が直接体験したことに留まりますが、シュッツ、それに関連する「現象学的社会学」研究での活躍を、少しご紹介したいと思います。

先生が社会学の理論を研究されようとしていた時代は、20世紀の社会学の大きな流れとして、体系的構造的な機能主義、ウェーバー、デュルケームを統合したと称されるパーソンズを中心とした機能主義の世界が大きな流れとしてありました。それに対抗して、個、人間、行為、意味の世界を追究する、社会学の別の潮流が出てきました。俗に言う「現象学的社会学」です。そういう流れの中でシュッツ研究をされました佐藤先生の位置は大きなものがあると思います。「現象学的社会学」は、現在でも大きな流れになり、さまざまな考え方が出ているわけですが、当時の学会論争で一つ記憶しているのは「現象学的社会学はリアリティを持つ、新しい方向を開発しているが、その名を示す現象学、現象学的哲学の基盤はどこにいったか」と、ある先生が言われたことがあります。「現象学的社会学」は発展を遂げたのですが、同時に、言い方はよくないですが、流行現象になってしまっているのではないかと、問題提起されたのだと思います。そういった中で、佐藤先生は当初

の哲学的、思想的な背景を絶えず持たれ、哲学と社会学の両者の研鑽を重ねられ、現象学的社会学の研究をしてこられました。先生のそばにおらせていただいて、私はそのように感じています。現在の社会学会、全体の思想状況の中で、大きな存在、貴重な存在ではないかと考える次第です。

先生のシュッツ研究における学問的信頼、確かさについてお話させていただきます。先生が学部長をされていた時、私は先生のおそばで今で言う副学部長をやらせていただきましたが、先生とは忙しい中でもよく学問的な話もしたわけですが、当時感じました先生の研究のスタイル、考え方を私なりに紹介させていただきたいと思います。

社会学というよりは哲学、思想で廣松渉という先生がおられます。この先生が、何を思ったのが社会学に進出してこられて『現象学的社会学の祖型』というシュッツ研究の難しい本を出されました。それを読むと、註のいたるところに佐藤嘉一先生の名が出てきます。廣松先生はほとんどは佐藤先生の翻訳なり、考え方を信頼して学問的に依拠しておられます。しかし、時々佐藤先生とは「違う」という箇所が出てまいります。研究内容についての評価は別にしても、哲学者、思想家として持てはやされた廣松先生は、社会学者としての佐藤先生に敬意を払っておられると同時に、挑戦もしておられるのです。当時私は若かったのか、佐藤先生に「廣松先生にやり返して下さい」と言ってしまいました。そして、先生は産業社会学部30周年の記念論集の時、シュッツの初期研究の論文を書かれ、佐藤先生の言葉を引用しますと、廣松先生に対して「受取人不在の手紙」をお書きになりました。廣松先生はもうお亡くなりになっており、時期が遅れて返事を書かれたことになるわけです。佐藤先生は寛容な方ですが、廣松先生に対してかなり反論されています。「フッサール、ベルグソンの現象学はシュッツの社会学にどう受け継がれるか。断絶しているのではないか」という廣松説に対して、敢然と論陣を張られたのが佐藤先生です。先生は「シュッツの社会学化」、先生の言葉を借りますと「間主観性」、さらには「社会性」、それをシュッツは獲得したのだ、視座の転換を行ったのだ、廣松先生が「シュッツは混乱している」ということに対して「そうではない。シュッツは視座を転換させたのだ」と理論を展開しておられます。その時のキーコンセプトが「間主観性」「社会性」であり、シュッツはそれを獲得した。さらに「プラグマ」、「プラクティス」、「実践」、さらには「ビルケン」という立場(他者に働きかけるという考え方)もシュッツは獲得し、ベルグソンとかフッサールの現象学に依拠したのではなく、それとつながりながらも新しい展開を遂げたのだと展開されています。廣松先生に対して佐藤先生は骨太な反論をされました。佐藤先生が学部長の時に書かれた論文なのですが。もし廣松先生が生きていて佐藤先生と論争されていたらと、今になれば残念な気がいたします。シュッツ研究について先生と何度かお話をさせていただきました、私にとっては面白かったし、有意義な体験でした。佐藤先生はシュッツ研究を通じて、極めて厳密な学者ですが、同時に骨太い先生だなという感じをいたしました。

もう一つ、佐藤先生は寛容であると同時に厳しいということを経験させていただきました。私が若い頃、初めての学会発表で、ウェーバーの報告をした時です。マルクスと対比し、マルクスの考

え方をウェーバーで包摂するという報告でしたが、後々に佐藤先生から褒めていただいて、「いいよ」と言っていたことがあります。先生はどなたでも褒めて教育をするということなのですね。寛容性の表れだと思います。産業社会学部は現代社会のテーマを総合的に解明する、諸科学が協同して解明する学部ですが、学問の協同性に関して先生は厳しかったと思います。とりわけ社会と個人、客観と主観、構造と行為、構造と意味の対立があるわけですが、安易に妥協的に折衷する考え方については厳しく叱っておられました。それぞれの立場に徹しながら、それぞれが展開、解明、究明していく、その上で相寄る協同でなければならない、安易な統合や協同に対する厳しい立場をとられておりました。マルクスでウェーバーを包摂するというようなことは言うけれども、実際には「マルクスをきちっとやれ、ウェーバーをきちっとやれ。それだけで一生かかる」ということだと思います。それが協同する際の、条件であると指摘されておられると、私は解釈しています。学問的な先生の寛容さと厳しさは、何度か接触させていただく中で、そういう記憶が思い出されます。今となっては、そういう形でこれから学部では先生とご一緒できないことに対して寂しさはありますが、幸い、名誉教授として、また特別任用教授として残られますので、これからもいろいろ教えていただくことになります。

先生の最近の研究、さらには若い学生への教育と言ってもいいと思いますが、「佐藤ワールド」とでも見える世界をつくってこられました。学部では「人間論」を教えておられましたが、興味深い人間類型を、シュッツの方法論を使いながら、この間読ませていただいただけでも、「民話『赤ずきん』にみるアイデンティティと社会問題」、「社会科学における『ロビンソン・クルーソー問題』いわゆる『ロビンソンの人間類型』論をめぐって」、「〈わたくし語り〉とドストエフスキー：『未成年』を現象学的社会学の目で読む」など次々と執筆し描いて発表しておられます。シュッツも「小説の意味構成」を著しておりますが、その方法を応用するだけでなく、さまざまな佐藤先生独自の方法を創り出し人間類型の具体像を展開して、「人間論」の教育に使われたと思います。

佐藤先生は研究も教育も校務も、十分な活躍をされました。そして定年を間近に控えても毎日、研鑽をしておられるという感慨も持ちました。研究・教育・校務それぞれの場面で、私どもが足もとに及ばないご活躍をされました。ただこの何年間で、先生はお体を悪くされています。かつてはよくお酒を飲みにいったりしましたし、その折には歌もたくさん歌われましたことは懐かしい思い出です。これから少し時間ができますので、佐藤先生どうかお体をお休めください。学部長としましても個人としましても、今、申しましたことを含めまして、本当に佐藤嘉一先生にはお世話になりました、感謝いたします。ありがとうございました。

2003年1月21日